〔調査概報〕

千葉市平山町　菱名貝塚調査概報

後藤和民
庄司克

I　遺跡の立地と周辺遺跡

この貝塚は、千葉市平山町字菱名にあり、その該当地はほとんど山下利夫氏の畑地に属する。
市中の中央部をほぼ東西に流れる都川の、ほぼ河口に近い矢作台から南東に向って分岐する仁戸名支谷は、平山集落を間に挾んでさらに二分されるが、この貝塚は、その南側の鎌取支谷の西岸にあり、北側の平山支谷との合流地点から約500 mほど遡った地点にある。しかも、北西部から広々と続く長大な台地の縁辺部で、その平坦部ぎりぎりのところに立地している。その中心部の標高は37 m、現在の水田面との比高は約20mをはかる。
現在の海汀線から約8Kmほど経だてているが、この仁戸名支谷のさらに上流には、有名な長谷部貝塚があり、その間に築地台貝塚や台畑貝塚などがある（第1図）。

それらおもな遺跡について概観すると、次のとうりである。

(1) 台畑貝塚　（平山町字台畑・高有所在）

菱名貝塚から鎌取支谷をへだてた東側の対岸、約600 mの位置にあり、平山支谷と鎌取支谷とに挾まれた舌状台地の平坦部の末端にあり、標高32～39m、水田面との比高は15～22mをはかる。直径約120 mの円形に、点在貝塚が数ケ所に分布しており、中期の加曽利E式の土器片も散見するが後期の堀之内～加曽利B式の土器片が圧倒的に多い（註1・2・3）。

(2) 築地台貝塚　（平山町字向塚町所在）

仁戸名支谷が平山支谷と鎌取支谷に分れる、その分岐点の北岸に当る台地縁辺部にあり、台畑貝塚とは平山支谷をへだてた対岸、わずか500 mの北東に位置する。標高38～40 m、水田面との比高は約20mをはかる。

昭和24年および25年に、立正大学史学研究室が発掘調査。貝層部は直径約150 mの範囲に、比較的薄い貝層が4カ所に分布し、全体で馬蹄形を呈する。このうち2カ所が発掘されたが、貝層は単層で、厚い部分で約1.30 m、薄い部分で15cmほどであったという。竪穴住居址らしき遺構が発見され、その付近から加曽利E式・堀之内式の土器片が発見された。また、加曽利B式や安行式などの土器片も見受けるが、主体は堀之内式であるという。

また堀之内式の大型甕形土器中から、屈葬の幼児骨が発見され、同時期の土偶頭部が出土し、その他、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石皿片、凹石、たたき石、軽石製浮子、石棒などの石器類も確認。鳥骨、魚骨、イノシシ、シカ、タヌキ、イヌなどの骨も検出されている（註1・2・3・4・5）。

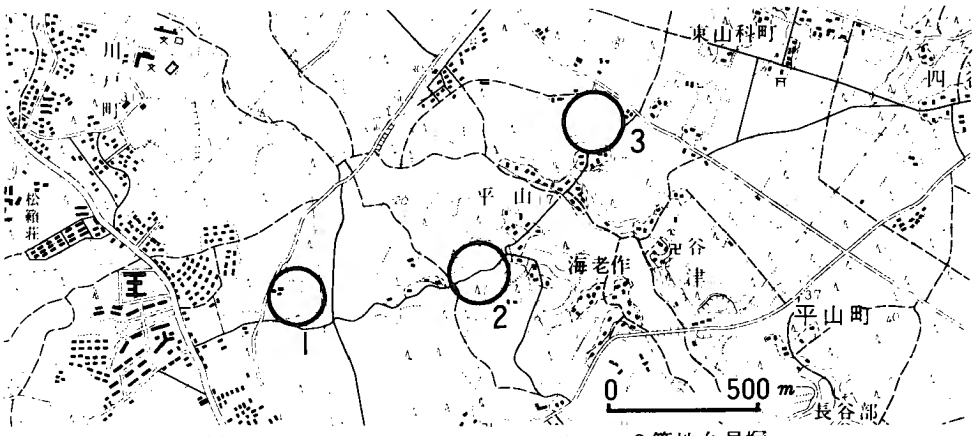
(3) 長谷部貝塚（平山町大字長谷部字主理台所在）

平山支谷の最奥部に当たり、菱名貝塚の南東約2Km、三方を小支谷に囲まれた舌状台地の先端部に立地。標高44m、水田面との比高は約20mをはかる。貝層部は、長径約200 m、短径約150 m、東に開口した馬蹄形貝塚。現在、「袖ガ浦カントリー」の敷地内。

明治12年、加藤厳夫氏発掘。昭和22年、酒詰仲男・伊藤和夫両氏発掘。そして昭和34年、ゴルフ場造成のため、早稲田大学考古学研究室が、ほとんど全域にわたって発掘したが、これらの成果については、ほとんど正式な報告がない。

ただ、伊藤和夫氏によると、昭和22年の発掘の際、阿玉台式と加曽利E式期の竪穴住居址が発見され、その他、阿玉台、加曽利E、堀之内、加曽利B、安行Ⅰ・Ⅱなど各時期の土器が出土し、打製石斧、石皿、たたき石、石製耳飾、土偶、石棒などの遺物が発見されている。貝層は純鹹または主鹹で、その中に魚骨、海獣骨、鳥骨、獣骨などが含まれていたという（註2）。

また、昭和34年の大発掘においては、「伸展、屈葬、被甕葬、男女合体葬など各種のめずらしい埋葬様式を持つ30数体の石器時代人骨を出土した」



第１図　菱名貝塚の位置図　　１菱名貝塚　　２台畑貝塚　　３築地台貝塚

（註６）という。このときにも数個の竪穴住居址が発見され、土器は「縄文文化中期より後期の時代を主体とし、前期の諸磯式及び晩期の安行Ⅲ式をも含む」（註７）といわれる。

なお、この菱名貝塚の周辺には、小円墳からなる群集墳がかなり密集している。たとえば、菱名貝塚の貝層部を囲むように、まず円墳10基からなる菱名古墳群（＝清水谷古墳群）があり、その対岸に台畑古墳群（円墳３基）、吾妻古墳群（円墳２基）、長谷部貝塚の周辺には、昭和34年に早稲田大学考古学研究室が発掘調査をおこなった、中原古墳群（前方後円墳３基、円墳６基）や塚原古墳群（前方後円２基、円墳４基）などがある(註1)。

（後藤）

Ⅱ　調査の目的と方法

加曽利貝塚博物館では、昭和41年の開館以来、博物館独自の基礎的な研究活動の一つとして、加曽利貝塚を中心とする東京湾沿岸の貝塚の様相を把握するため、まず千葉市内の主要な貝塚の地形測量および地点的試掘調査を、計画的・組織的に半永久に継続しておこなうことを企画してきた。

それは実際に博物館において、貝塚の様相に関する具体的な展示を試れば痛感することであるが、現在、代表的な「馬蹄形貝塚」や「環状貝塚」を取り上げてみても、その全貌が測量によって図面に定着されたものはきわめて少なく、また、発掘調査によってその所属時期や住居址等の存在が確認されたものは至って乏しい。その大部分が個人的な踏査による主観的観察や表採資料等による表面的な把握にとどまり、不確実なデーターに基づくものばかりである。このように、個々の貝塚さえ不明確であっては、元来それらの有機的関連性や総合的な研究を必要とする、集落構造や貝塚文化の様相は到底把握できないのである。

そこで、全国でもっとも貝塚が密集している東京湾沿岸において、縄文中期から晩期にわたる集落遺跡で、北貝塚と南貝塚という２つの大型貝塚を伴い、日本最大の規模を誇る加曽利貝塚に、貝塚文化研究のメッカとして「貝塚博物館」が設立された以上、ここで、せめて千葉市内の主要貝塚の現状を把握し、その研究上の最低限度の条件として、地形測量と２～３の地点の試掘をおこない各貝塚の性格を予察しうる客観的データーを確保し、それを蓄積してゆくべき使命がある。

その第１年次の事業として、従来一般にその名が知られながらも、未調査のため、その全体の様相もおおよその性格も把握されていない、しかも保存状態が比較的良好で、将来そのまま保存しておきたいと思われる遺跡として、この菱名貝塚を取り上げることにした。

1.　調査の内容および方法

(1)　測量調査　（第２図）

遺跡の主体部が立地する台地の地形的特色と、貝塚の形態や規模を確認するため、貝塚を載せている舌状台地の主要な平坦部を中心に、東西300 m、南北200 mの範囲にわたって、トラバース法による、縮尺400分の１、等高線（contour）0.5～0.25 mで、厳密な平板測量をおこなった。なお、貝層分布については、ボーリング棒を深さ１ mまで刺し入れて、その輪郭をできるだけ詳細に把握し、それを図面に定着した。

(2) 地点試掘調査 （第4図）

測量調査の結果、この貝塚は南・西・北の三方にやや集中的な貝層堆積があり、その相互間に7カ所にわたって小規模な独立貝層が点在することが判明。この大型貝層部にA・B・D・Fの4トレンチを設け、その貝層堆積の様相や文化層の形成を観察し、点在貝層部では、落花生の葉色が悪く、比較的早く枯れかかっているsoiled markをえらび、ボーリングによってローム基盤の凹みを確めた上で、住居址や貯蔵穴などの集落遺構を確認するため、C・E・（F）トレンチを設定した。

Aトレンチ 南側の大型貝層堆積群の西端部に比較的薄い貝層をねらって、東西2m×南北3mのトレンチを設定した。

Bトレンチ 南側の大型堆積群の中央部で、もっとも貝層の厚い部分をねらって、2×3m＋1×2mのカギ形のトレンチを設定。

Cトレンチ 南側の大型堆積群東端に、2×12m、その東側に独立する点在貝層部に3×2mの2本のトレンチを設定。

Dトレンチ 北側の大型堆積群東端部に、4×2mのトレンチ、その南側にすでに掘られていたゴミ穴を拡張し、2×5mのトレンチを設定。

Eトレンチ 北西部に点在する貝層中に、すでに掘りくぼめられていたゴミ穴を拡張し、2×3mのトレンチを設定。その断面のみを調査。

Fトレンチ 西側の大型堆積群のほぼ中央部でsoiled markが認められ、貝層堆積と住居址調査の両方を兼ね、4.5×2mのトレンチを設定。

2. 調査の体制

(1) 調査期間

測量調査 昭和42年10月1日～10月31日

地点発掘調査 昭和42年11月1日～11月31日

(2) 調査担当者

測量調査 千葉市加曽利貝塚博物館

発掘調査 A・B・Cトレンチは同博物館担当 D・E・Fトレンチは千葉市立高等学校（社会研究部歴史班）担当。

調査員 後藤和民（博物館学芸員）、宍倉昭一郎（市立高校教諭）、平田美智子・庄司克・今井公子・栗野克己・青木明・梅村亘・川崎芳男・天野努・堀越正行・斉藤喬・奥山睦義副島和明・藤瀬稜博・島村哲郎（以上明治大）米田耕之助（立正大）、長久淳子（国学大）。

（後 藤）

Ⅲ 調査の概要

1. 貝塚の様相

(1) 貝塚周辺の地形

この菱名貝塚を載せている台地は、その北側には仁戸名支谷、東側には仁戸名支谷から分岐した鎌取支谷を控え、しかも西側には仁戸名支谷から分岐する小支谷の谷頭と、南側には鎌取支谷からさらに分岐した小支谷の谷頭が迫り、一つの「くびれ部」（neck）をなす。すなわちこの台地は、その「くびれ部」からほぼ北東に向って、巾 250m、長さ約600mの舌状台地をなしている。

その「くびれ部」に近い標高35～37mの最高部が、ほぼ100m四方の狭小な平坦部をなし、その上に本貝塚が載っている。そして、貝層部の末端から、台地は四周に向って下降しているが、その西方および南方は急峻な崖面をなし、北方および東方はややゆるやかな傾斜をなしつつ、その裾部は急な崖面をなしている。

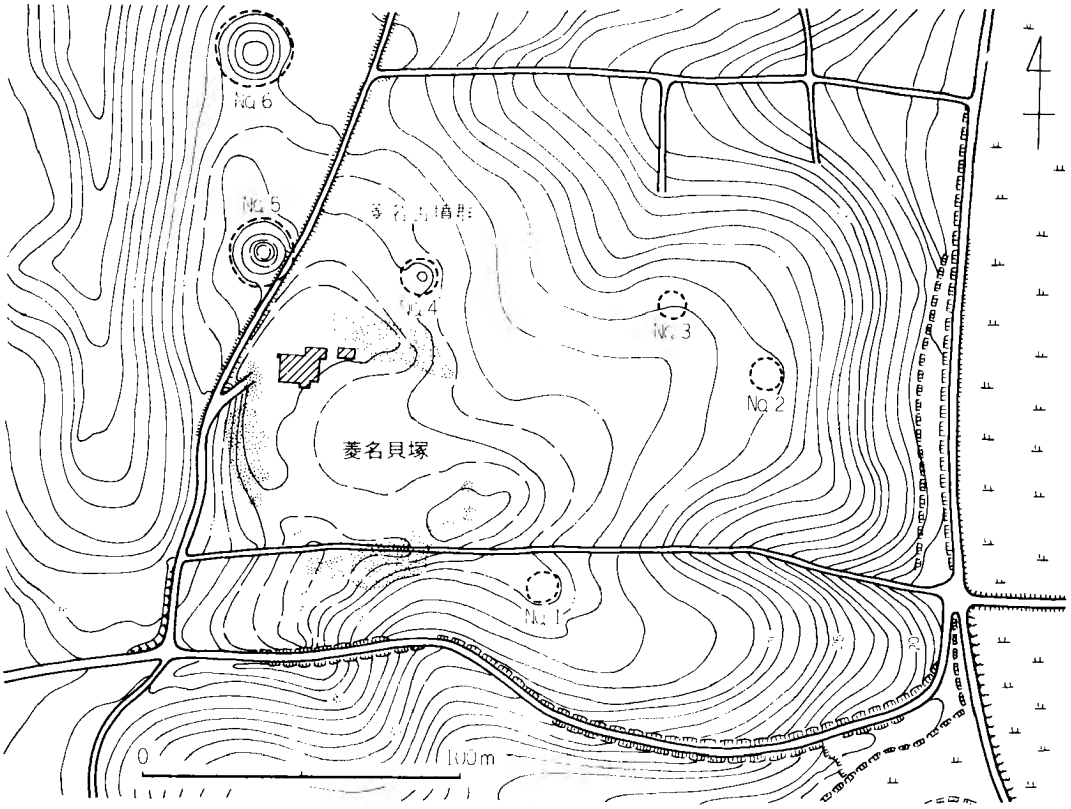
なお、貝塚の中心部から距離的にもっとも近いのは、西側の谷頭で、その貝塚側の側面は急峻な崖面をなしているものの、谷頭の谷底道はかなりゆるやかな傾斜で、それは直接仁戸名支谷へと通じている。すなわち、貝の採集や漁撈活動のため都川本谷や東京湾に出るには、この谷頭がもっとも近い位置にあるので、当時のムラへの出入りは、この谷頭を利用したものと思われる。

なお、この貝塚の周辺には、ちょうど貝層部を取り囲むように円墳が6基、台地平坦部の縁辺に展開している。それが故意か偶然か、貝層部を避け、その外側の標高32～36mの位置を選んでいることは興味深いところである。この古墳群は「菱名古墳群」と名付けたが、この6基の円墳のほかに、さらに4～5基の円墳が含まれる可能性がある。（第2図）。

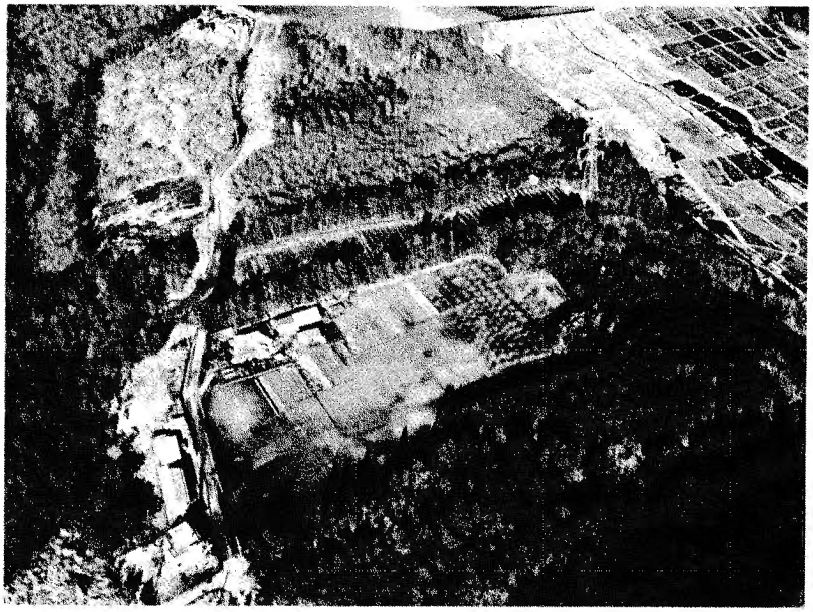
(2) 貝塚の形態および規模

この貝塚は、全体として直径約90mの円形に展開しているが、3ヶ所の大型貝層堆積群と、それらの間に点在する数ヶ所の小型貝層とに分けられ、その中央には、直径約55mの凹んだ空白部がある。

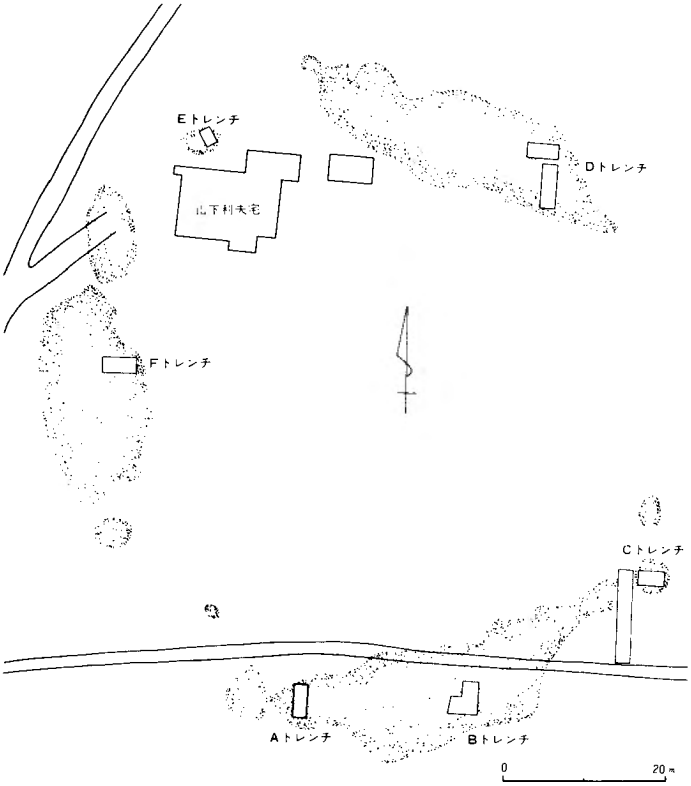
大型貝層堆積群とは、ブロック状の小型貝層が幾重にも重なり合い、連結し合って、結果論的にその表面的な拡がりが大きくなったものや、あるいは、短期間であっても集中的に大量の貝殻が投棄され、部厚い貝層堆積を示すものをいう。この貝塚では、南側に最大巾13m、最長46m、厚さ約150cmのもの、北側に最大巾13m、最長45m、厚さ約210cmのもの、西側に最大巾13m、最長28m



第2図　菱名貝塚の地形測量図



第3図　菱名貝塚の全景（南方より）



第4図　菱名貝塚のトレンチ設定図

厚さ約120cmのもの、以上3ヶ所の大型堆積群が認められている。その相互間には30〜42mの間隙があり、そこに2〜3ヶづつの小規模な貝層が点在している。

小型貝層堆積とは、少量の貝殻が小範囲に投棄され、それが広範囲に点在しているものをいう。この貝塚では、7カ所に認められ、直径約2mのものから、6m×12mのものまで、その平面的な形や大きさはまちまちであるが、その貝層の厚さは比較的薄く、しかもその貝層の下面には必ず住居址の床面が埋没していることが、ボーリング調査の結果確認されている。したがって、これらの貝層は、その住居址が廃棄されたのちに、その竪穴を埋めつくす目的で、そこを中心に貝殻が投棄されたものと思われる。その点、大型貝層堆積群とは様相を異にしている。

中央空白部とは、円形に展開する貝層部の内側で、求心的な位置であるが、なぜか貝層の堆積もなく、また住居址の埋没も発見されない部分をいう。従来「馬蹄形集落」や「環状集落」の中心といわれ、「中央広場」と呼ばれてきたもので、一般に、周辺の貝層部に比べて、すりばち状に凹んでいる傾向がある。この貝塚でも、貝層部は標高36〜37mにあるのに、その中央空白部は35.5〜36.5mと、やや凹んでおり、その北東部の貝層の切れ目に向って、ゆるやかに傾斜している。この形態から、この貝塚全体を、北東に開口部をもつ一種の「馬蹄形貝塚」とする観方もある。

この貝塚の表面形から、従来の貝塚の形態分類によって分類すると、いかなる形態に属するであろうか。たとえば、酒詰仲男は次のように分類している（註8）。

(a)　貝殻が不規則に数地点バラバラと散布しているもの
(b)　半月形のもの
(c)　馬蹄形あるいは環状をなすもの
(d)　特にその環状部が土手状に高まっているもの
(a')　これ以外の型のもの

厳密にいえば、菱名貝塚はこれらのいずれにも属さないが、強いていえば、(c)の「馬蹄形あるいは環状をなすもの」に属することになる。しかし、同じくこの種類に存する他の貝塚、たとえば築地台貝塚や台畑貝塚などと比べてみると、はたして同類に論ぜられるかどうかはきわめて疑問が多い。とくに、蕨立・さら坊貝塚のような点列貝塚との比較、(d)の「その環状部が土手状に高まっているもの」との区別が明確ではない。

このように、従来のような貝塚の最終段階における表面的な形状によって、いかに形態分類をおこなってみても、その分類自体からはなんらの意義も読みとることはできない。また、そのような皮相的な現象によって、飛躍的な推論を展開してみたところで、それは歴史的研究の上ではなんらの価値ももたないことは、貝塚の実質的な意義を究明しょうとする者にとっては、先刻自明なことであろう。われわれにとって、この貝層の分布状態が重要なのは、それと住居址との関係によって、その貝殻投棄という行為そのものの意義を追求す

ることを目的としているからである。　（後藤）

2. 住居址および貝層堆積

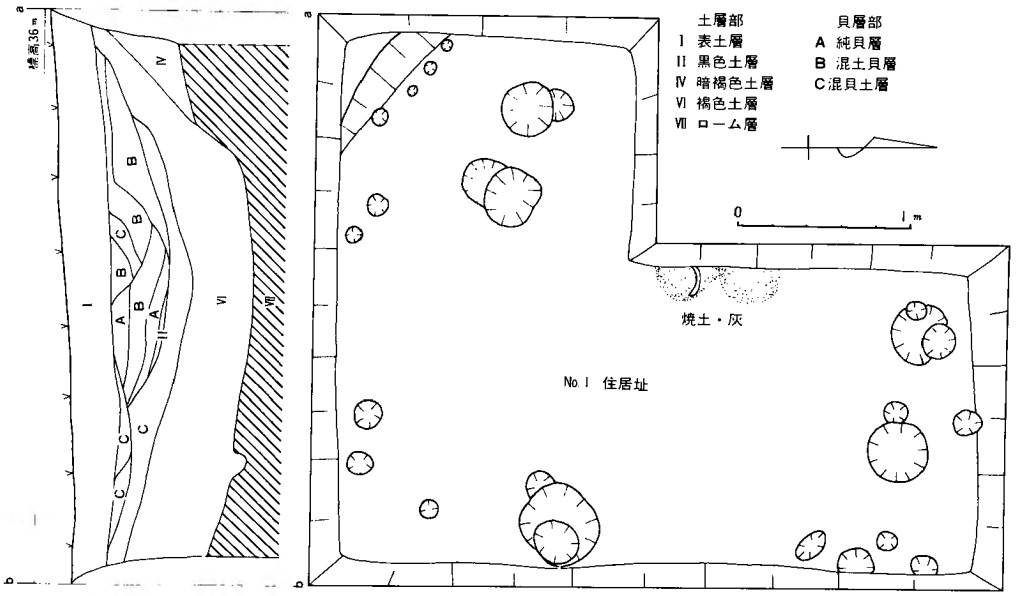
当初、貝層堆積の様相を調査するために、大型貝層堆積群にそれぞれA・B・D・Fのトレンチを設定。住居址の埋没状態を確認するために、点在貝層にそれぞれC・Dトレンチを設定した。ところが、B・C・D・Fの各トレンチから、それぞれ1～2基の住居址が発見され、合計7基の住居址を確認した。なお、AおよびEトレンチは攪乱甚大のため調査を断念した。ここでは、各住居址を中心に、その周辺の貝層堆積状態を概観する。

No.1住居址　（第5図）

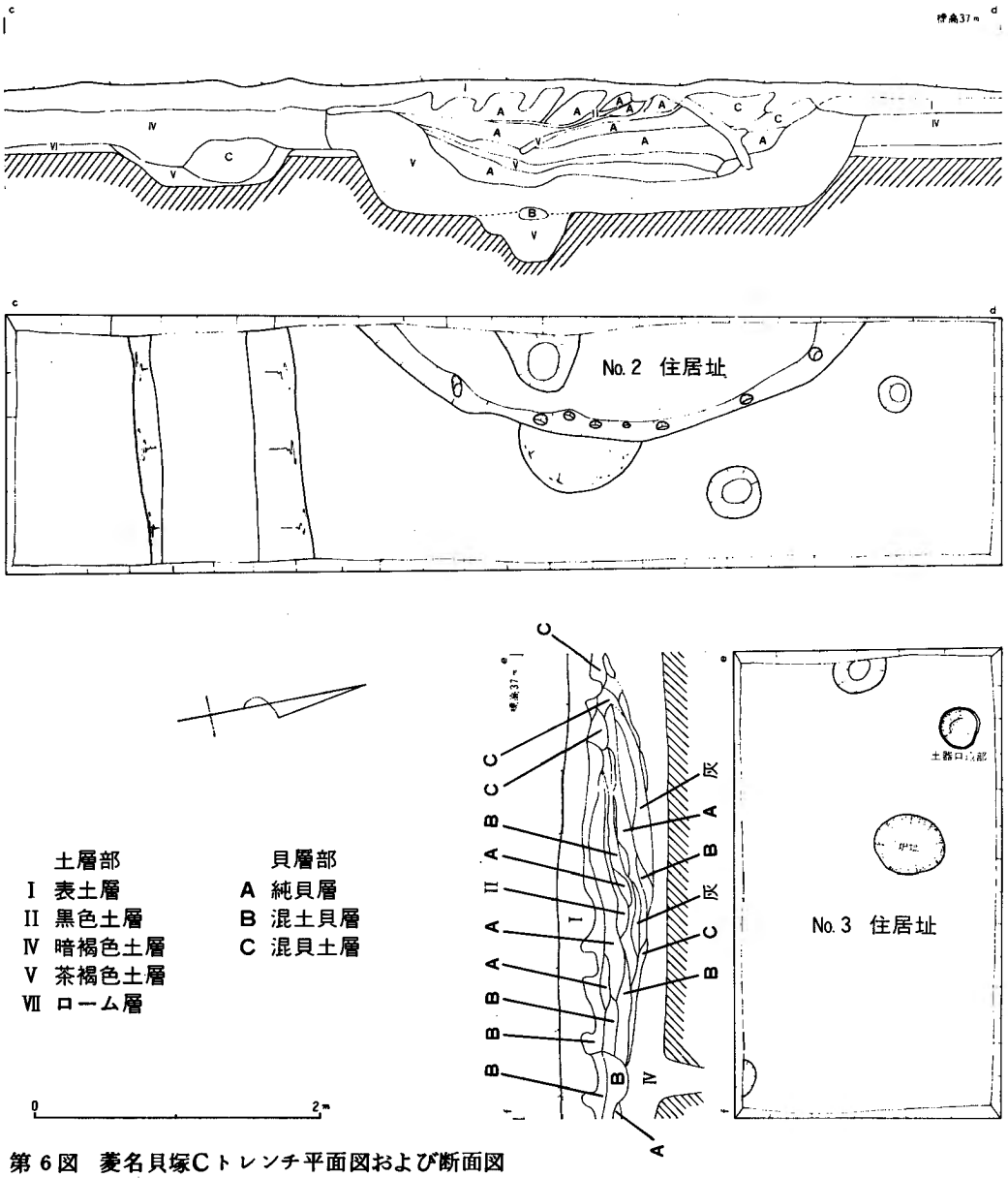
南側の大型貝層堆積群の中央部で、もっとも貝層の厚そうな場所に設置されたBトレンチより発見。表土下 80 ～120 *cm*、ローム層を約50*cm*ほど掘り込んだ床面を確認。トレンチの北端部において、人骨および犬の埋葬があり、そのため床面の一部に凹凸が生じている。しかし、全体的には、地表下1 *m*のあたりで平坦に踏み固められた面があり、そのほぼ中心部に当る位置から、直径40～50*cm*の炉址を発見した。このトレンチの区画内では、住居址全体のプランは確認できなかったが、そのトレンチの北東端および南西端において、壁の立ち上りを認めたので、炉を中心にして推定すれば、この住居址は直径約5 *m*の円形を呈することになる。しかし、柱穴の配列や2つの炉の存在からみて、おそらく2基の住居址の重複と思われるが、その明確な識別はできなかった。

この住居址の上には、13層にわたる複雑な層が1.2 *m*ほどにわたって堆積していた。そのおもな堆積層をみると、まず、この住居址の床面を覆っていたのは、ローム質の黄褐色土層で、厚さ 30 ～50 *cm*におよんでいる。その上に、レンズ状の貝層部が載っているが、それが10層にも分けられる複雑な層状堆積を示している。その下層に当るハマグリ混貝土層だけは、住居址の全面を覆うほどの大きな広がりと15～20*cm*の厚さをもっているが、その他の混貝土層、混土貝層および純貝層は、比較的小さなブロック状堆積が相互に入り組みながら複雑に重なっている。なお、最上層の混貝土層は厚さ30*cm*で平均化しているが、これが耕作による攪乱層であることはいうまでもない。

なお、この住居址は、炉中より発見された土器により、加曽利EⅠ式に属することが判明した。また、この住居址の床面上から発見された家犬骨の周囲にも多数の土器片が散乱していたが、同じく加曽利EⅠ式期に属するものであった。



第5図　菱名貝塚Bトレンチ平面図および断面図



第６図　菱名貝塚Ｃトレンチ平面図および断面図

No.２住居址　（第６図）

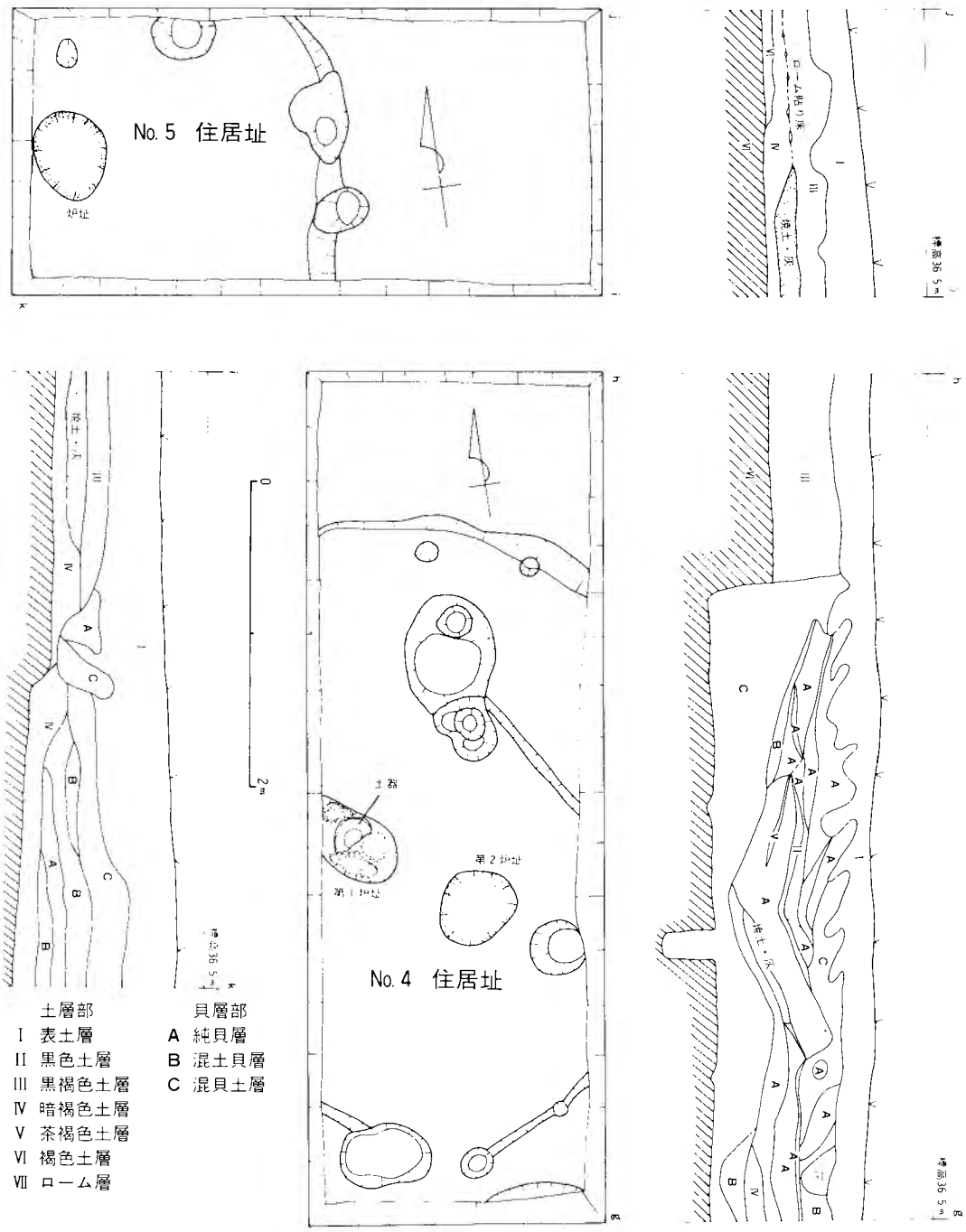
南側の大型貝層堆積群の東端に設置された西側Ｃトレンチより、地表下90cm、第３層暗褐色土層より掘り込み、ローム層を約40cmほど掘りくぼめた住居址床面を発見。トレンチ内では、床面のごく一部を露呈したにすぎないので、その正確なプランは不明であるが、直径４ｍ以上の円形を呈するものと思われ、周溝はなく、その代りに壁面に沿って直径10cm前後の小さな壁柱穴が並んでいる。

この住居址の床面上には、住居址の形に沿って厚さ22～50cmの茶褐色土層が覆っており、その上に厚さ70cmにおよび貝層がレンズ状に堆積している。この貝層は少なくとも６層に分けられ、そのほとんどが純貝層からなっている。木の根などの後世の攪乱もあるが、元来は比較的平坦な堆積を示していたものと思われる。

なお、この住居址は、その床面上の土器および覆土層中の土器から加曽利ＥⅠ式に属することが確認されている。

No.3住居址　（第6図）

南側の大型貝層堆積群の東側に独立した小型貝層に設置された東側Cトレンチで発見。表土下75cmのローム層上に床面が築かれていた。トレンチ中央に直径約45cmの炉が発見されたが、2m×3mの範囲内では、プランの形態や規模は不明である。なお、炉のわきの床面上に、加曽利EⅠ式の深鉢形土器の口縁部のみが置かれていたが、その内側に焼土や灰が付着しており、元来炉縁の土器として利用されていたのが、炉から抜いてわきに



第7図　菱名貝塚Dトレンチ平面図および断面図

置かれたものと思われる。

この床面直上には、厚さ10～40cmの暗褐色土層が覆っており、その上に厚さ10～55cmの貝層がレンズ状に堆積していた。この貝層は15層以上の小さなブロックに分けられ、それが複雑な互層をなして重なっている。とくに、その間に厚さ5～15cmにおよぶかなり大きな灰層がはさまっているのが注目され、また純貝層、混土貝層、混貝土層のほかに、黒色土層などの間層があり、その貝殻投棄行為の断続性や多様性を物語っていた。

なお、床面上の炉縁土器や散乱する土器片によって、この住居址の時期は加曽利ＥⅠ式期に属することが確認された。

No.4住居址　（第7図）

南側の大型貝層堆積群の東端に設置された、南側Ｄトレンチから発見。表土下100～110cmの深さに、第2層黒褐色土層上面からローム層を約40cmほど掘り込んで、よく踏み固められた床面が築かれていた。トレンチの中央部に、東西に並ぶ2つの炉址があり、西側の炉（第1炉址）は45×55cmの楕円形、東側の炉（第2炉址）は40×60cmの長円形を呈する。この住居址も2基の重複または拡張の可能性もあるが、トレンチの範囲内では、その床面の段差や周溝の切り合いも認められず、また、全体の規模や形態も不明である。ただ、北側の壁の立ち上りが出ており、炉の位置から想定して、この住居址が直径4m以上の円形を呈することは明らかである。

この床面の直上には、厚さ10～90cmの茶褐色混貝土層が覆っており、その上に厚さ25～80cmの貝層がレンズ状に堆積している。その貝層は少なくとも18層に分けられ、その相互間に灰や焼土、黒色土層や茶褐色土層などの薄い間層がはさまっている。しかし、ここでの貝層は、カキ・シオフキ・キサゴ・ハマグリなどの単純または複合の純貝層が多く、その貝の量も他の地点に比べてかなり多いことが目立った。

なお、第1炉址中の土器片や床面上および覆土中の土器片から、この住居址は加曽利ＥⅠ式期に属することが確認された。

No.5住居址　（第7図）

同じく、北側Ｄトレンチから発見。表土下90～105cmでローム層を堅く踏みかためた床面を検出。トレンチの西端部には50×60cmの炉址があり、その中央部に壁の立ち上りがある。このトレンチ内では、この住居址の形態や規模は不明であるが、炉址と周壁とによって、直径4m以上の円形を呈するものと思われる。

この床面の直上には、暗褐色土層が厚さ12～25cmにわたって覆っており、その上に厚さ60cmほどの貝層がレンズ状に堆積している。この貝層は5層に分けられるが、そのほとんどが混土貝層と混貝土層から成っており、その一部に厚さ10cmばかりのキサゴ純貝層が挟まれているにすぎない。しかも上面を覆っているもっとも厚い層が混貝土層であるから、Ｃトレンチの南側に比べて、その貝の量は決して多くない。これほど接近した地点でありながら、No.4号住居址とNo.5号住居址では、その上に投棄される貝層の様相が異なっている点に注目すべきであろう。

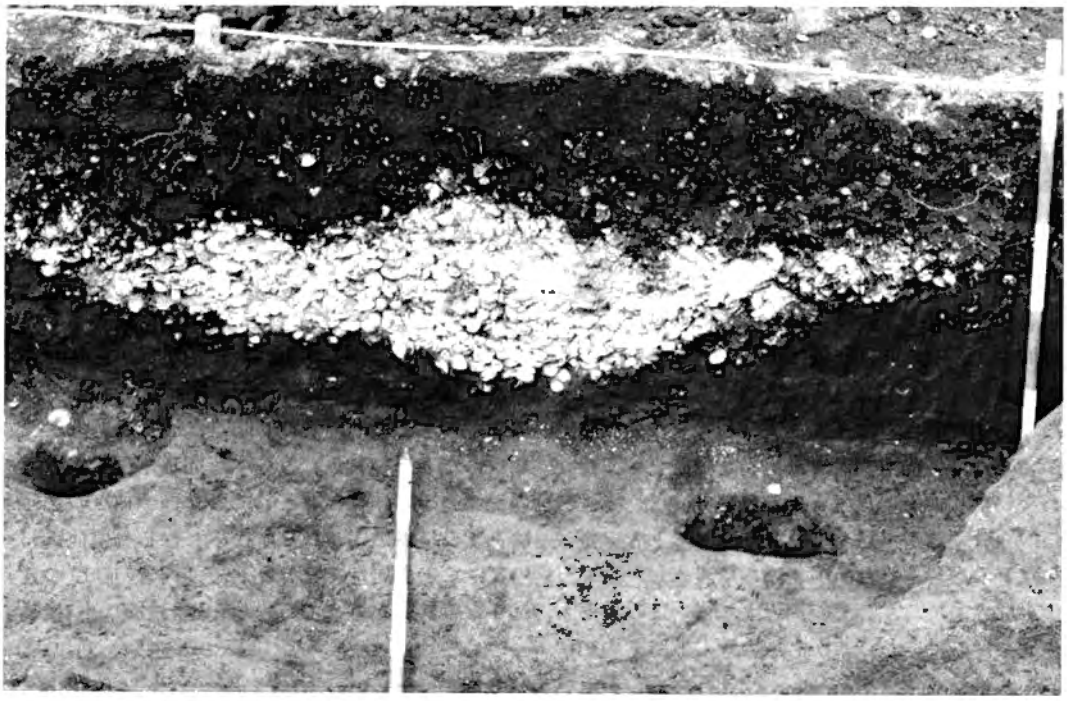
なお、床面上および覆土中の土器片から、この住居址は加曽利ＥⅠ式に属することが確認された。

No.6およびNo.7住居址　（第8図・9図）

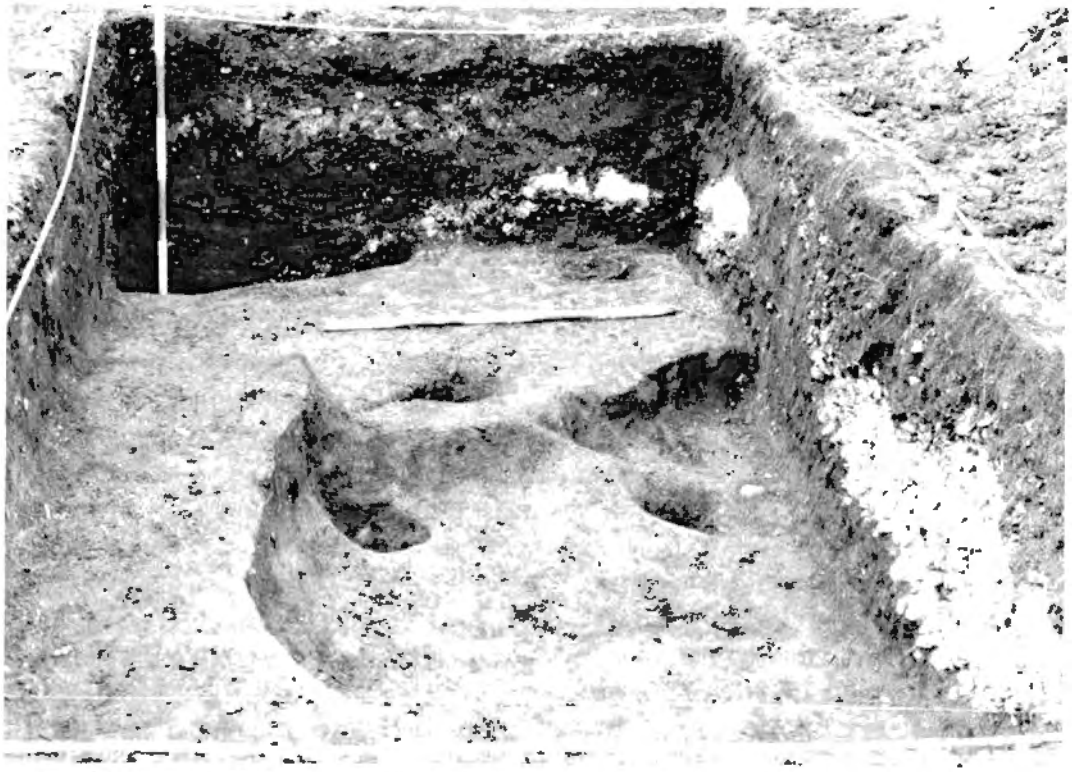
西側の大型貝層堆積群は、ボーリングの結果、その貝層が比較的薄いので、その中で、落花生の成長が悪く、早く枯れた部分にＦトレンチを設置し、ここでは、貝層堆積の様相と同時に住居址の埋没状態を観察することにした。

ところが、この地点の貝層は薄く、耕作による攪乱が激しいため、このトレンチ内における貝層は、全体が層序のはっきりしない混土貝層および混貝土層からなり、それも厚さ50cm前後のレンズ状堆積を示し、その下に20～50cmの暗褐色土層の覆土をへだてて No.6号およびNo.7号住居址の床面を発見した。このトレンチ内では、それぞれごく一部を露呈したにすぎないので、その形態や規模は不明である。ただ、その壁の落ち込みから、No.6住居址は直径3m以上のほぼ円形を呈するものであろうことは想像できる。

なお、この2基の住居址の所属時期については、その伴出資料が乏しく、なかなか判定しがたい。ただ、この覆土および貝層から出土した土器片は、阿玉台式が全体のうちの30%、加曽利ＥⅠ式が30%、加曽利ＥⅡ式が20%で、残る20%は判定が不能なものであった。　（後藤）



第８図　菱名貝塚のNo.６号住居址内に堆積した貝層



第９図　菱名貝塚発見のNo.６号およびNo.７号住居址（手前がNo.７号住居址）

3. 埋葬遺構

今回のA～Fの6本のトレンチ調査において、埋葬遺構に遭遇したのはBトレンチだけであり、そこで発見されたのは、人骨1体と家犬骨2体とであった。その出土状態を簡単に述べておく。

(1) 人骨の埋葬 （第10図・11図）

Bトレンチの南端において、表土下82cm、暗褐色土層中から発見。頭位をほぼ西方に向けた、仰臥伸展葬で、その頭部北側に接して、加曽利EⅠ式の深鉢形土器（ほぼ完形、第12図3）が横倒しになり、また腰部の南側にも加曽利EⅠ式の深鉢形土器（完形、現地で盗難にあう）が倒立して置かれていた。頭位はN64°Wであった。

この人骨の近辺には、キサゴ・ハマグリ・シオフキなどの破粋された貝がまばらに混入した暗褐色土が囲繞しており、その周辺はローム質の黄褐色土層に変っていた。しかも、人骨の下にも約30cmばかりの暗褐色土があり、その底面が No. 1住居址床面を約20cmほど掘りくぼめて舟底形を呈していた。したがって、これが埋葬時の墓壙であることはほぼ間違いなかろう。しかし、人骨の上を覆っていた混貝土層やその上に累積していた混土貝層などのレンズ状堆積群には、攪乱の跡はなかった。おそらく、その墓壙は、No. 1住居址が黄褐色土層によってほぼ完全に埋没した後に、その上面から35～40cmの深さまで掘り込まれたものと思われる。

なお、その掘り込まれた黄褐色土層から出土する土器片や、人骨の頭部や腰部から発見された完形土器によって、この人骨の所属時期は加曽利EⅠ式期と判定される。

(2) 家犬骨の埋葬 （第11図）

人骨と同じく、南側の大型貝層堆積群の中央に設置されたBトレンチの南端より発見。表土下約1m、No. 1住居址の床面に接しており、頭位をほぼ南方に向け、左側下横臥の姿勢で埋葬されていた。この家犬骨の周囲には、別段土質の違いも墓壙状の落ちこみも発見されなかったが、住居址の床面において、この家犬骨の近辺においてのみことさらに土器片が集中していた。

この家犬骨は、埋葬人骨ときわめて接近した位置から発見され、人骨の墓壙の底部に近いところに家犬骨の墓底があることから、あるいは同時埋葬の可能性もあろうかと、現地で詳細に観察した。その結果、人骨の墓壙は家犬骨の埋葬位置からわずかにはずれ、その舟底形の墓底は、家犬骨の埋葬ベースとなっている住居址床面をわずかに掘りくぼめているので、両者の埋葬時期も多少のずれがあったことが判明した。

しかし、この家犬骨周辺から出土した土器からみて、この家犬骨も加曽利EⅠ式期に属することは明らかである。しかも、人骨の頭部から発見された土器と比較してみても、ともに加曽利EⅠ式の古手のもので、両者の時間差はそれほど大きくなかったと思われる。とくに、同じ No. 1住居址の廃棄後における埋葬としても、同一地点の選定はあまりに偶然に一致しすぎる。むしろ生前において、この住居址を媒介として、両者の結びつきはかなり親密なものであったと思われる。（後藤）

3. おもな出土遺物

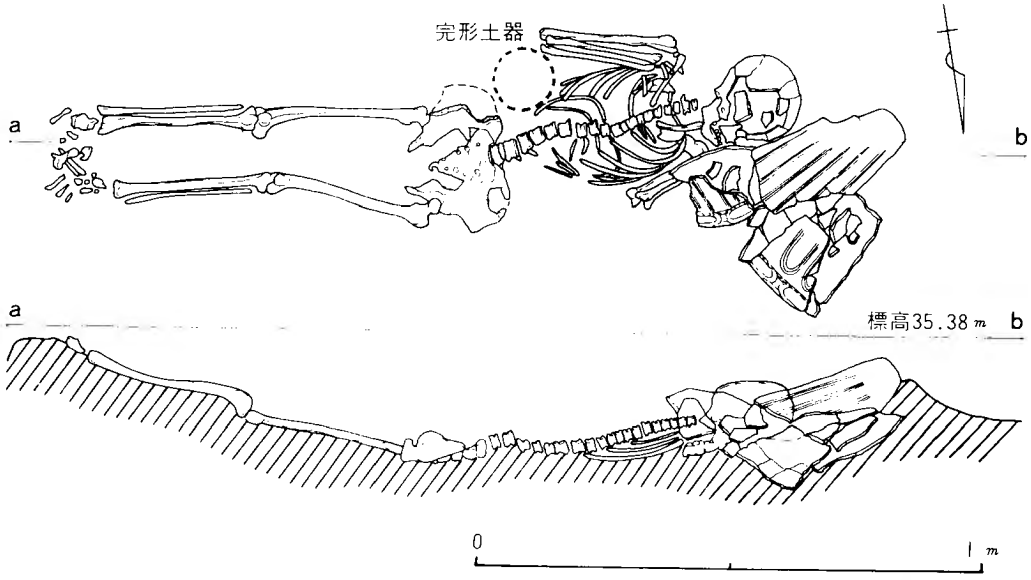
今回の調査で出土した遺物類については、現在整理中のため、ここではその概略を述べるにとどめ、詳細は後日の本報告に譲りたい。そのおもな遺物は次のとおりである。

(1) 土 器 （第12図・第13図・第14図）

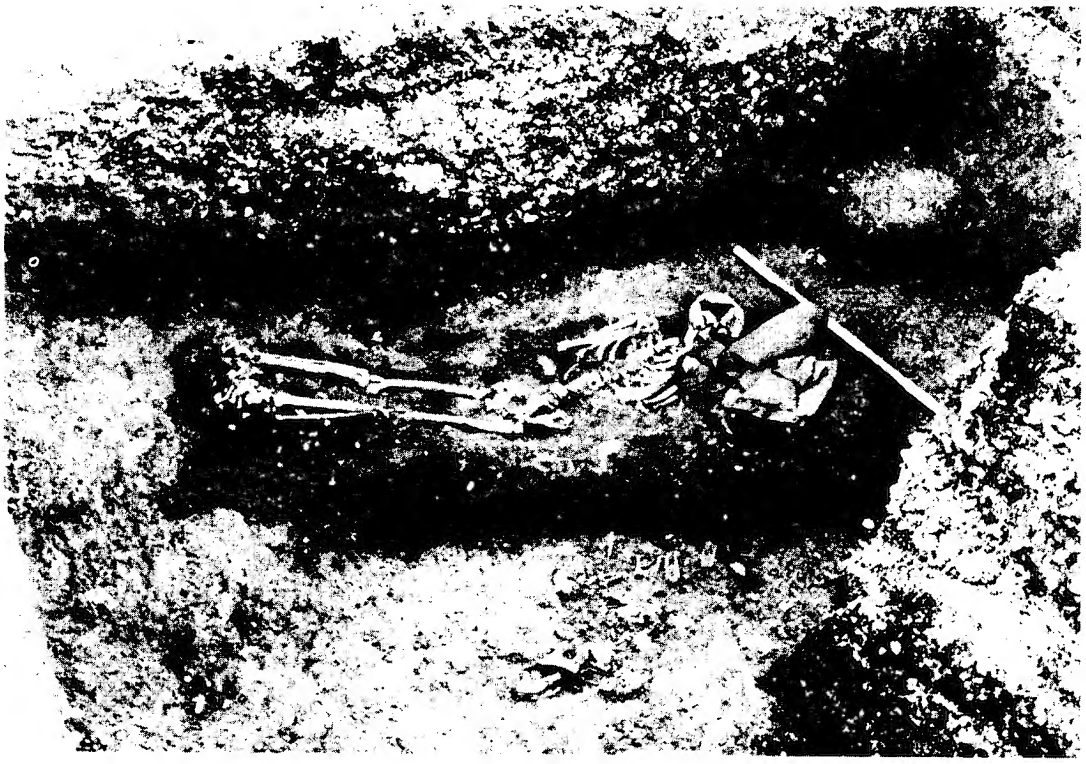
縄文中期の阿玉台、勝坂、加曽利EⅠおよび加曽利EⅡの各型式の土器が出土しているが、その主体を占めるのは加曽利EⅠ式で、数量的にも圧倒的に多かった。完形および復原可能の土器は第12図と第13図に示すとおりの6点で、その特徴は次のとおりである。

1は、いわゆる「プレ加曽利E式」のキャリパー形深鉢で、胴部以下を欠いている。口縁部の直径は33cm、現高14cmを計る。この土器はCトレンチ内発見の No. 3住居址の炉址より北西約60cm離れた床面上に置かれていた。この土器の内部には灰が充満していたのに対して、すぐ近くにあった炉址には焼土のみで灰の痕跡はなく、ちょうど灰の詰った炉縁の土器を炉から取りだして横に置いたような状況を呈していた。

2は高さ19cm、口径16cmの小型の深鉢形土器で今回の発掘では唯一の完形品である。Cトレンチの No. 3住居址内に落ちこんだ貝層中に投げこま



第10図　菱名貝塚Bトレンチ発見埋葬人骨実測図



第11図　菱名貝塚Bトレンチ発見の埋葬人骨と家犬骨

れた状態で出土した。加曽利E1式。

3は高さ42cm、口径27cmの大型の深鉢形土器。口縁部直下に、阿玉台式によくみられる楕円状の隆帯文が巡っているが、型式的には「ブレ加曽利E式」に相当しよう。この土器はBトレンチ発見の人骨の頭部付近より出土したものである。

△ 1）ブレ加曽利E式土器　H＝14cm

△ 2）加曽利E I 式土器　H＝19cm

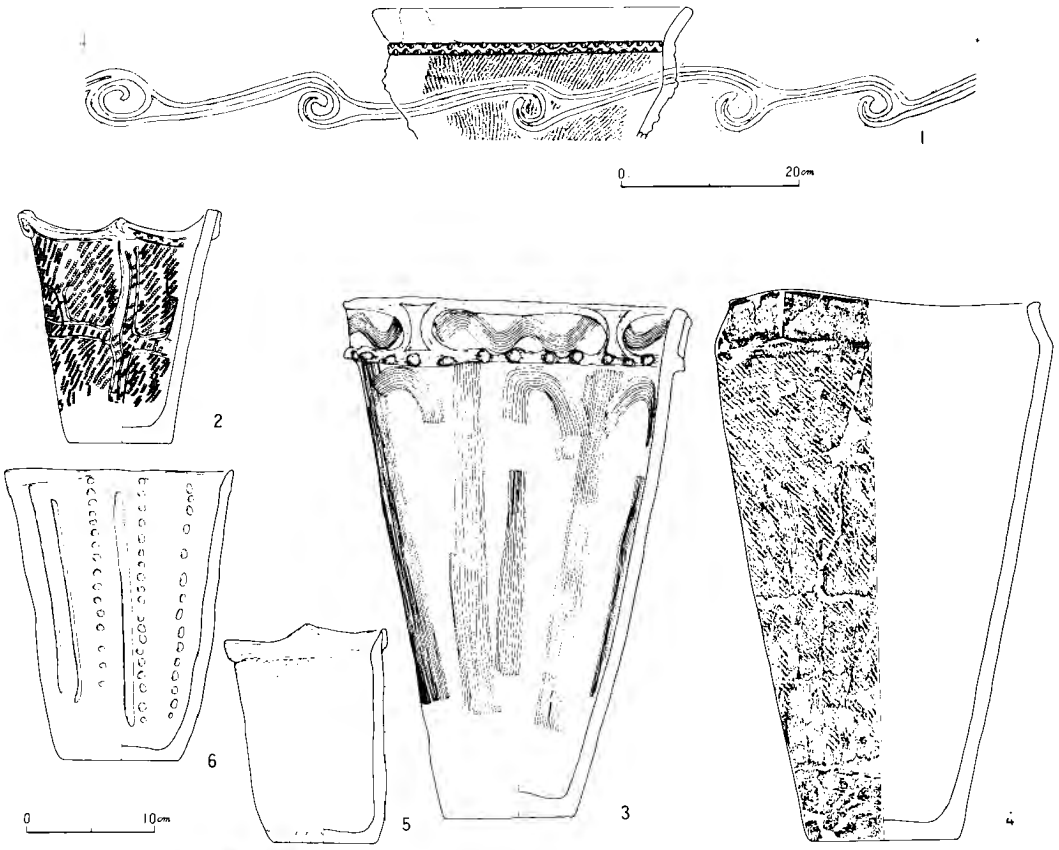
◁ 6）加曽利E II 式土器　H＝22.5cm

5）加曽利E I 式 ▷ 土器　H＝17cm

▽ 3）ブレ加曽利E式土器　H＝42cm

▽ 4）加曽利E I 式土器　H＝44cm

第12図　菱名貝塚出土の土器（1）



第13図　菱名貝塚出土の土器 (2)

1・3プレ加曽利E式土器、2・4・5加曽利EⅠ式土器、6加曽利EⅡ式土器

4は加曽利EⅠ式の深鉢形土器で、高さ44cm、口径26cmを計る。Cトレンチの第4層・キサゴ貝層中の出土である。形態は口縁部の無文帯の部分が内傾する単純な形の深鉢形を呈している。

5は小型の深鉢形土器で、口縁部に約1.5cm巾の凸帯が巡っている。高さ17cm、口径推定13cmである。胴部はまったくの無文で、底部から口縁部に向ってヘラ整形痕がある。Cトレンチのハマグリ貝層中から出土。加曽利EⅠ式期に属する。

6は高さ22.5cm、口径18.5cmの深鉢形土器、Cトレンチの第3層中より出土した。文様は加曽利EⅡ式に特徴的な懸垂文と太めの列点文との組合せによるものであるが、この文様は器面を一周せず、半面のみの施文で、その裏面は全くの無文。

その他に第14図に示す大型破片が出土しているが、このうち1はDトレンチ内の№4住居址の第1炉址の炉縁に使用されていた。火熱を受けてもろくなっており、内部には灰が充満していた。文様は断面三角形の紐線と列点文によって構成されている。阿玉台式の古手のものであろう。

4・5はいわゆるプレ加曽利E式の深鉢形土器の三窓把手で、Bトレンチの家犬骨の脇から出土したものである。また6はプレ加曽利E式の浅鉢形土器で、口縁部の無文帯部分の内・外面に赤色顔料が塗られている。

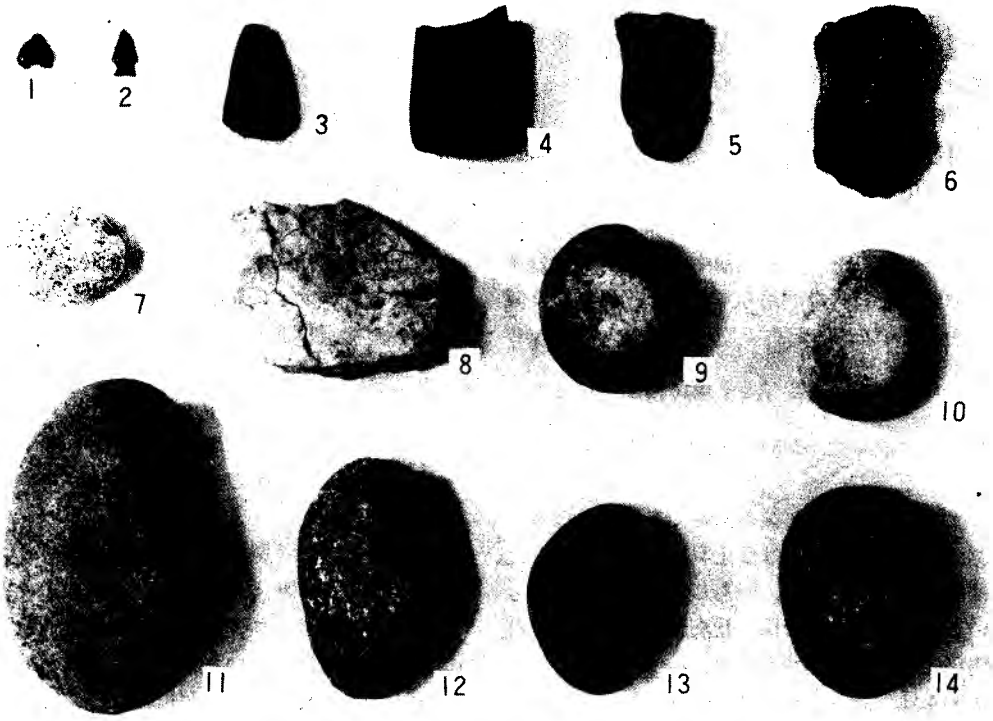
(2) 石　器　(第15図1～14)

今回出土した石器類のうち、形態が判定できるものは23点で、その内訳は、a.石鏃(2点)、b.磨製石斧(2点)、c.打製石斧(2点)、d.すり石(5点)、e.凹石(3点)、f.たたき石(5点)g.軽石(1点)、h.砥石(1点)、i.用途不明棒状石器(1点)であった。

これらのうち、すり石はいずれも大型品であり、その台石となるべき石皿は今回の調査では発見されなかった。したがって、すり石と凹石との組合

第14図　菱名貝塚出土の土器 (3)

1・2阿玉台式、3～8プレ加曽利E式、9～14加曽利EⅠ式



第15図　菱名貝塚出土の石器
1・2石鏃、3・4磨製石斧、5・6打製石斧、7軽石製品
8砥石、9・12・13たたき石、10凹石、11・14すり石

せも考えられるが、今回の出土品に関するかぎりでは、凹石に対してすり石の方が大きすぎるため、この組合せには疑問が残る。いずれにしても今回の調査は部分的な試掘であり、出土した石器類をみても数量的にアンバランスである。このような問題についての考察は後日に譲りたい。なお、石器類の石材についても現在調査中のため割愛した。以下、おもなものについて概略を記す。

a. 石　鏃　（第15図1・2）

1・2はともにCトレンチの表土攪乱層中よりの発見である。1は黒曜石製、2はチャート製で形態的には2がいわゆる飛行機型を呈している点が注意される。

b. 磨製石斧　（第15図3・4）

3はDトレンチの混貝土層から出土。現長5,4㎝。体部は研磨されて定角形に近く整形されているが、刃部は大きく剝離している。4はやや大型だが、頭部を欠いている。現長6.8㎝。刃部は鋭く整形されており、刃先は直線的である。

C. 打製石斧　（第15図5・6）

5・6ともに分銅形を呈し、片方の刃部を欠いている。5はCトレンチの第2層より出土。6はBトレンチ中央の家犬骨の脇から出土した。伴出土器はブレ加曽利E式である。

d. すり石　（第15図11・14）

11はBトレンチの埋葬人骨の脇から出土。大型で長径は16㎝をこえる。ほとんど未加工のやや扁平な河原石を利用しており、使用擦痕は片面には全体にあり、その裏面には部分的にしか認められない。14はCトレンチの No. 1ピット内より出土。長径9.5㎝の扁平楕円形を呈しており、形を整えてから使用したとみえ、自然面は残っていない。また、その平坦面の中央部には敲打痕が認められ、これはたたき石にも併用されたと思われる。

e. たたき石　（第15図9・12・13）

9はCトレンチ No. 1ピット中、12はBトレンチのハマグリ貝層中、12はFトレンチの No.6住居址床面上より出土。いずれも長径7.5～11㎝の未加工の河原石を利用しており、その中央部の表裏に敲打痕がある。

f．凹　　石　（第15図10）

表採品であるが、唯一の完形品である。扁平な河原石を利用しており、中央部の凹みは浅い。

g．軽石製品　（第15図７）

楕円形に整形された軽石で、Ｃトレンチの No. 1ピット中より出土した。

h．砥　　石　（第14図８）

Ｂトレンチのキサゴ純貝層中より出土。砂岩系のやや扁平な石材を利用しており、片面がすり減って凹んでいる。

(3)　骨・貝器・貝製品　（第16図１～13）

おもな出土品は、貝輪と尖頭状骨器および貝刃などである。

１・２はイタボガキ製の貝輪である。１はＢトレンチの第２層中、２は混土貝層中より出土した。２は層状剝離が激しく、いちじるしく原形を損っているが、１は完形で保存状態がよく、大型で孔の内径は 6.5 × 5.2 cm を計る。

３・４は、アカニシの体層部をくり抜いた貝輪未製品で、Ｂトレンチより発見された。３はその内径が 5.0 × 3.5 cm、４は 6.5 × 4.5 cm である。

５・６はサルボウ製の貝輪未製品で、５はＢトレンチの第２層中、６はハマグリ純貝層中より出土。５は腹縁に沿ってすり切っただけであるが、６はさらにその切口と腹縁部を研磨している。

７は獣骨片を尖頭器状に削り、両側面を研磨したもので、長さ 6.3 cm を計る。Ｃトレンチ第13層中の出土で、今回唯一の骨角器である。

８はアリソガイの腹縁をすって三角形状に加工したもので、Ｄトレンチの攪乱層中より出土した。

９～12はハマグリ製貝刃で、Ｂトレンチ拡張区からの出土。いずれも中・小型のハマグリの腹縁部分を中心に小さく打ち欠いて、ノコギリ状の刃をつけているが、その全面に刃をつけているのは12のみである。

13はビノスガイ製の貝刃である。一般に、貝刃はハマグリやカガミガイなどの近海産のものを利用している。ビノスガイは現在でも東北地方より以北にしか棲息しない北方産で、当時としては、おそらく貴重品であったと思われるのに、それが貝刃に利用されているのはめずらしいことである。

第16図　菱名貝塚出土の骨・貝器、貝製品

１～６　貝輪および貝輪未製品、　７　尖頭状骨器、　８　アリソガイ製貝製品

９～12　貝刃

第17図　菱名貝塚出土の土錘実測図

第1表　菱名貝塚出土土錘一覧表

No.	出土地点		出土層位	土器片時期	使用部分	形態	重量	備考
	トレンチ	グリッド						
1	D	—	表面採集	不明	胴部	楕円形	12g	縁辺部研磨
2	D	1	第4貝層(キサゴ貝層)下部	加EI	胴部	不整長方形	20	紐掛 2ヶ所
3	D	2	第1層(表土・攪乱層)	加EI	口辺部	楕円形	30	紐掛 2ヶ所
4	A	1	第一層(表土・攪乱層)	加EI	胴部	不整長方形	30	紐掛 2ヶ所
5	C	7	第1層(二枚貝主体貝層)	加E	胴部	不整長方形	26	紐掛 2ヶ所
6	C	6	第3層	加EI	胴部	不整方形	32	紐掛 2ヶ所
7	D	2	第2層(二枚貝混貝土層)	加E	胴部	不整方形	28	紐掛 2ヶ所
8	D	2	第2層(二枚貝混貝土層)	加E	胴部	不整形	25	紐掛 2ヶ所
9	B	2	第3層(ハマグリ貝層)	阿玉台	口辺部	不整方形	33	紐掛 2ヶ所
10	B	1	第6層(ハマグリ混土灰貝層)	加EI	胴部	不整方形	32	紐掛 2ヶ所
11	B	1	第4層(キサゴ貝層)	加E	胴部	長方形	30	紐掛 2ヶ所
12	D	2	第2層(二枚貝混貝土層)	加E	胴部	方形	33	紐掛 2ヶ所
13	B	1	第3層(ハマグリ貝層)上部	加EI	口縁部	楕円形	42	紐掛 2ヶ所
14	C	8	第1層(表土・攪乱層)	阿玉台	胴部	五角形	40	紐掛 2ヶ所
15	C	6	第3層(ブロック貝層)	加E	胴部	不整円形	30	紐掛 2ヶ所
16	B	—	表面採集	加EI	胴部	方形	45	紐掛 2ヶ所

(4) 土　錘　(第17図)

土錘は別表のとおり、表採品を含めて総計16点発見された。千葉県下における中期の貝塚としては、数量的には少ない部類に属しよう。

表が示すとおり、各トレンチの各層中から少量づつ出土しており、1カ所から集中的に発見されるという現象はみられない。しかし、その使用されている土器片は、やはり加曽利EI式土器の胴部のものが圧倒的に多い。縁辺の整形の仕方については、ただ打ち欠いただけのものが多く、縁辺をていねいにすっているものは、わずかに1点のみであった。そのため、形状はほとんどのものが不定形である。なお、これらを重量別にみると、10g代のもの2点、20g代が5点、30g代が7点、40g代2点と、30g前後のものが主体を占めていることがわかる。　(庄司)

Ⅳ　総　括

今回のささやかな調査によって、はたしてわれわれは、菱名貝塚についていかなる認識を得ることができたのであろうか。今後のこの種の調査のためにも、ここに若干の問題を提起すべきであろう。だが、それは本報告にゆずることとし、ここでは、その一端を被歴するにとどめたい。

今回試掘したA～Fの6本のトレンチのうち、後世の攪乱が甚だしいため、調査を断念したAおよびDトレンチを除くと、大型堆積であろうと点在であろうと、貝層部に設置されたいずれのトレンチからも必ず1～2基の住居址が発見されている。落花性のsoiled mark に設置されたCおよびFトレンチからは当然としても、地表では予知できなかったBおよびDトレンチからも住居址が

発見されたことは、偶然とはいえ注目すべき一致である。

しかも、それぞれのトレンチにおける貝層堆積の状態をみると、点在貝層のみならず大型貝層堆積群においても、その貝層の主体的な部分はすべて住居址が廃棄された後に、その凹みに投入されたレンズ状堆積によって占められているという事実である。いかに集中的に投棄されたと思われる大型堆積群においても、表面的にみた貝殻散布の拡がりは大きいが、その主体的な貝層堆積のすべてが各住居址ごとに独立しており、その貝層の集中は、実は住居址の集中を物語っているということである。これはDトレンチにおける No. 4 および No. 5 住居址の上に堆積した貝層の相異によっても明らかである。そして、表面的な貝殻散布はその各住居址ごとの貝層上面が、耕作などによって攪乱されたための拡散もあろうが、ほぼ住居址の存在位置と一致している。このことは、大型堆積群においても点在貝層においてもいえることであり、現に、No. 2、No. 3 および No. 6 住居址において明確に表明されている。

ところが、馬蹄形や環状を呈する大型貝塚の中には、必ずしも大型貝層堆積群の下に住居址を伴わないものがある。たとえば、千葉市内だけでも園生貝塚、犢橋貝塚、加曽利南貝塚、長谷部貝塚、誉田高田貝塚、奥新田貝塚、長作築地貝塚、矢作貝塚、多部田貝塚、草刈場貝塚、台門貝塚などかなり随所で確認されている。その他、市川市の姥山貝塚、堀之内貝塚、曽谷貝塚など、一々挙げるときりがないが、それらの貝塚のほとんどが縄文後期の堀之内式期以降のものに多くその傾向がみられることは確かである。

それに対して、貝層部の下には必ず住居址が埋没していることが確認されているものは、千葉市内では、蕨立貝塚、築地台貝塚、滑橋貝塚、野田小谷貝塚、そして菱名貝塚と、その発掘例も乏しいが、少ないなりに、そのすべてが縄文中期の加曽利E式期に属するものに限られていることが注目される。すなわち、偶然が重なれば必然となるという原理から、それが一般的傾向を示す可能性が大きいのである。

そこで、従来、大型貝塚と小型貝塚の相異については、その集落の存在期間の長短としてとらえられ、たとえば市川市・堀之内貝塚を例にとって、「ひとりの人間が食べられるていどの貝殻を、毎日つづけて千年間おなじところに捨てたとすれば、堀之内貝塚くらいの大きな遺跡にもなりうる」とし、「堀之内貝塚の面積は、一時期の集落の大きさを示すのではなくて、おなじ所に住みついた時間の長さをあらわしている」(註9)という。そして、「現在しめしている平面形こそは、かってそこに馬蹄形の集落が形成され、それが長い期間にわたってまもられていたことをしめすもの」(註10)とされてきた。したがって、貝塚の発展過程からみるならば、点在貝塚が長期にわたって同じ場所に存続するならば、やがて大型の馬蹄形や環状の貝塚に発達するものと理解されてきた。

しかし、点在貝塚の下に必ず住居址があるならば、しかもそれが廃棄された後に、貝殻が投入されるのであるならば、最後の住居址に貝殻を投入した人びとの住居は、いったいどこにあったのであろうか。しかも、古い竪穴が廃棄される直前に新しい竪穴がすぐ近くに構築され、移り住んでから古い竪穴に貝殻を投棄したのであるならば、その貝層は、まだ住居址の床面が露出している間にすなわち、それほど時間的な間隙もなく貝殻が投入されて然るべきであろう。ところが、今回露呈した7基の住居址においては、その床面上に直接貝層が堆積した例は1例もなく、すべてが黄褐色や暗褐色の土層によってある程度埋没しかかった後に、まだ埋めつくされない凹みの部分に貝層がレンズ状に堆積している。したがって、住居址廃棄の時期と貝層堆積の時期との間には、かなりの時間的空間があったことが予測できる。たとえ、住居址の所属時期も貝殻投棄の時期も同じ加曽利EⅠ式期に属していても、その土器型式による時間的規定は、あくまでも瞬間的同時性ではなく、かなり永い不特定な期間を示すにすぎないからである。

すると、住居址群の展開の時期と、貝殻投棄の時期との間には、その土層が住居址内に堆積するほどの時間的ずれがあった可能性があり、住居に居住していた人びとと、貝殻を投棄した人びととは、別の世代の人びとか、あるいは別のムラの人びとであった可能性も考えなければならない。そうなると、なぜ、住居址の展開も貝層の分布も、結果的に同じような環状を呈するのであろうか。そして、古い住居址の埋まり切れないでいる凹み

をめがけて貝殻を投入した人びとの住居は、いったいどこに存在していたかが問題となる。この問題は、あくまでも疑問として残されるし、それを解決するためには、当然ながら、貝塚全体の発掘調査のみならず、貝塚の周辺一帯の徹底的な追求が必要となってくる。それがおこなわれていない現在、この問題について軽々しい推論や独断は避けなければなるまい。

ただし、ここで指摘しておかねばならないことは、中期の点在貝塚と、後期の馬蹄形貝塚との間には、その存続期間の長短にかかわらず、貝殻投棄の指向性において本質的な相異があるということである。すなわち、点在貝塚においては常に廃棄された住居址を埋めつくすという志向性があり、したがって、貝層の位置が住居址の展開にとらわれているが、馬蹄形貝塚においては、その貝層の堆積は決して住居址の位置とは無関係に独自の展開を示しているということである。しかも、中期の点在貝塚が比較的短期間の存在を示し、後期の馬蹄形貝塚が比較的長期間の存続を示しているのは、その集落のあり方や、その生産的背景の違いとしてとらえるべきである。なぜならば、1つの集落が1カ所に1,000年以上存続した例は、この時期以外には、いかなる時代にも見当らないし、それだけ定着しうる条件を確保することは、当時それほど簡単なことではなかったはずである。

したがって、まずわれわれは、点在貝塚と馬蹄形貝塚とを、その表面的な形状の相異としてではなく、その主体となるべき集落や人間集団の行動のあり方を中心にして、その歴史的変遷の中でとらえるべきである。その意味で、ここに点在貝塚と馬蹄形貝塚との本質的な相異の可能性を提示して、向後の研究に期待しておきたいと思う。

従来、集落の研究というと、貝塚の表面的な形状によって、集落自体の展開を規定しょうとする傾向が強かった。したがって、貝塚の形態をあれこれと恣意的に分類すれば、そこからなにか集落の構造が把握されやしまいかという、他愛のない錬金術的期待を抱いてきた傾向がある。それは、もともとナンセンスなことである。なぜならば、集落は貝塚に付随するものではなく、貝塚が集落に付随するものだからである。だから、いくら貝塚自体の調査・研究をおこなっても、集落の全貌は把握されるわけがないし、したがって、貝塚自体の意義さえも捉えることはできないはずである。貝塚の意義は、集落全体の様相の中でしか規定できないということを、ここいらで肝に銘じて自覚すべきであろう。（後藤）

〔脚註〕

(1) 武田宗久「原始社会」『千葉市誌』 昭28
(2) 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』 昭34
(3) 酒詰仲男『日本貝塚地名表』 昭34
(4) 久保常晴「千葉県千葉郡築地台貝塚」『日本考古学年報』2 昭29
(5) 久保常晴「千葉県千葉郡築地台貝塚」『日本考古学年報』3 昭30
(6) 『千葉県文化財総覧』千葉県教育委員会 昭44
(7) 『千葉市の文化財』千葉市教育委員会 昭36
(8) 酒詰仲男「貝塚」『日本考古学辞典』東京堂 昭37
(9) 芹沢長介『石器時代の日本』築地書房 昭35
(10) 岡本勇「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』10－1 昭38